

No.3 「地球の食糧生産量」

人類の食糧は農産物、畜産物、水産物に大別される。当然の事ながら農産物は耕地の、畜産物は草原の、水産物は海洋及び河川の許容量（再生産力）に依存している。従って、許容量を超えた収穫が行なわれれば、総収穫量は徐々に低下することになる。食糧生産に関する地球の許容量はいわば定期預金の元金であって、そこから生まれる利子以上の収穫を行なえば元金を取り潰し、その後の利子は減少する。最終的には元金を食いつぶすことになる。

近年の食糧増産の歴史は二つの時期に大きく分けられる。

20世紀初めまでのフロンティア時代は耕地面積や漁場の拡大によっていた。この時代は収穫量が地球の許容量内にあり、未知の開拓地も存在していた。いわば量的（領土）拡大の時代であり、先進国はアジア、アフリカ、中東、南米に植民地を拡大し、帝国主義戦争が多発した時代でもある。

20世紀半ばから地球上で拡大できるフロンティアはなくなり、その後は科学技術の進歩による増産の時代に入る。農業では単位当たり収量の増加、漁業では漁獲技術の進歩によって収量を増産させてきたのである。

1940年代6億トンであった世界の穀物生産高は1997年には18億トン余となり約50年間で3倍以上の伸びを示している。漁獲量は1900万トン（1950年）から9300万トン（1997）と4倍以上の伸びである。この時代の食糧増産は著しい科学技術の進歩によってもたらされたものであり、正に、自然の制約に対して科学技術が素晴らしい勝利を勝ち取った時代であった。

今まで人類は地球の許容量を計測する技術を研究することなく、如何に効率良く食糧資源を獲得するかという収穫技術のみを向上させてきたのである。市場経済システムの上では当然のことであるが、これが許されるのは年間収穫量が地球許容量（再生産量）の範囲内に収まっていることが条件である。残念ながら、現在でも我々は正確に地球の許容量を測る技術は持っていない。しかし、重大なのは食糧生産の現場である耕地や漁場で、1990年以降、年間の穀物生産量、漁獲量の伸びが鈍化し、地球の許容限界に達している兆候がみられることである。

穀物生産量は1992年（18億トン）以降殆ど増加していない。一方当然のことであるが、急激な人口増加によって1人当りの年間生産量は1984年（342kg）から1997年（322kg）と減少傾向を示している。また地下水の過剰汲み上げによる耕地の乾燥化、塩害が主要な食糧生産国であるインド、中国、アメリカなどに多発している。漁獲量も8900万トン（1989）から9300万トン（1996）と微増である。最近では世界15の漁場の内13の漁場で衰退傾向が出ているばかりかマグロ、タイ等の一部の魚種は絶滅の危機にある。これらの兆候から推定すれば、既に現在の食糧収穫量は地球の許容限界（穀物生

産量で約20億トン、漁獲量で約1億トン以下と思われる)に達していると判断できるだろう。

他の資源と同様に食糧消費量にも先進国と途上国の間で2極化が生じており、食糧配分の格差が拡大している。世界人口の8億人が一時的な栄養不足に陥っており、2億人の子供が飢餓に苦しんでいる。そのうえ、88ヶ国が「低所得食糧不足」国とされている。一方、日本を含めた先進国では飽食による廃棄物の増大が問題になっている。世界最大の食糧消費国である米国では穀物換算で1人当り年間約800kg(インド200kg)もの食糧が消費され、国民の50%以上が肥満と判定される異常な事態になっている。

人類がこのまま進めば、21世紀前半に食糧危機が発生する多くの兆候が既に存在している。おそらく途上国から始る食糧危機の連鎖は食糧自給率の低い国に及ぶだろう。EU諸国が自国の自給率を上げてきている所以である。

*飢餓時のガンジー

1920年代インドで干魃による飢餓が発生した時、インド国民が宗主国イギリスに食料援助を要求したことがあった。ところがガンジーは「我々は食糧はいらない」と言った。「食糧が外から入ってくればくるほど、私たちの食糧生産の基盤が壊れていく。それは私たちの力を削ぐことである。我々自身で食糧を生産するように努力しよう」と彼は呼びかけた。

援助から自立は生まれない

*「いかなる人を賢というか？あらゆるものから何かを学びとる人。いかなる人を剛というか？自分自身にに克つ人。いかなる人を富というか？足るを知る人」
—ユダヤ法典・タルムード

*「事足れば足るにまかせて事足らず、足らで事足る人ぞ安けれ。」—天海僧正

*「足ることを知れば、家は貧しいといえども、心は福者なり。足ることを知らざれば、家は富めるといえども、心は貧者なり。此処をよく弁え、かりにも奢らず、物好みすべからず。諺に好きが身を亡ぼすといえるを心得べし」

—平尾厚康